

子どもの言葉を豊かに育てるための保育者の役割
—子どもの貧困対策につながる就学前教育の効果を参考にして—

山本 幾代*

The Role of the Childcare Workers to enrich the Children's Language:
Referring to the effectiveness of preschool education on the alleviation of child poverty

Ikuyo Yamamoto

要約

本稿は、貧困対策につながる就学前教育の効果について国内外の調査研究をまとめ、就学前教育の重要性を明らかにし、幼稚園教育要領や保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領における領域「言葉」の記載事項と保育者の配慮点を確認した。そして、子どもの言葉を豊かに育むための保育者の役割について考察したものである。

キーワード：子どもの貧困，言葉，語彙数，保育者の役割

(Abstract)

In this article, first, I made clear the importance of preschool education by summarizing several surveys held in and outside Japan which refer to the effectiveness of preschool education on the alleviation of child poverty. Second, I confirmed the matter mentioned in Section of the area of "language" in the course of study for kindergarten, nursery, and centers for early childhood education and care, and the matters to which childcare workers should pay attention. Finally, I considered the role of the childcare workers to enrich the children's language.

Keywords: child poverty, language, size of vocabulary, role of childcare workers

1. はじめに

厚生労働省が毎年発表する国民生活基礎調査の概況の中でも、平成 25 年の国民生活基礎調査の概況[1]で示された子どもの貧困率 16.3%は新聞・ニュース等でも大きく取り上げられ、世間の注目を集めた。ここで言う、子どもの貧困率とは、「17歳以下の子ども全体に占める、等価可処分所得（世帯収入から税金・社会保険料等を除いたいわゆる手取り収入のこと）が貧困線に満たさない子どもの割合」のことで、当時の新聞・ニュース等では「子どもの貧困 6 人に 1 人」と大きな見出しで報道されていた。そして、貧困線とは、「等価可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得の中央値の半分の額」のことで、平成 24 年の貧困線は 122 万円であった。先日公表された平成 28 年の国民生活基礎調査の概況[2]の中でも平成 27 年の貧困線は前回と同じで 122 万円で、子どもの貧困率は 13.9%（7 人に 1 人）と過去最悪だった前回から 2.4 ポイント改善された。実に平成 15 年から 12 年ぶりの改善であったが、依然としてシングルマザー等ひとり親を取り巻く状況は厳しく、貧困による子どもへの悪影響や不利益¹には社会全体の注視と国及び地方公共団体を挙げた対策²が必要である。

表 1 貧困率の年次推移（平成 28 年の国民生活基礎調査の概況[2]から引用したもの）

	昭和 60年	63	平成 3年	6	9	12	15	18	21	24	27
	（単位：％）										
相対的貧困率	12.0	13.2	13.5	13.8	14.6	15.3	14.9	15.7	16.0	16.1	15.6
子どもの貧困率	10.9	12.9	12.8	12.2	13.4	14.4	13.7	14.2	15.7	16.3	13.9
子どもがいる現役世帯	10.3	11.9	11.6	11.3	12.2	13.0	12.5	12.2	14.6	15.1	12.9
大人が一人	54.5	51.4	50.1	53.5	63.1	58.2	58.7	54.3	50.8	54.6	50.8
大人が二人以上	9.6	11.1	10.7	10.2	10.8	11.5	10.5	10.2	12.7	12.4	10.7
	（単位：万円）										
中央値（a）	216	227	270	289	297	274	260	254	250	244	245
貧困線（a/2）	108	114	135	144	149	137	130	127	125	122	122

- 注：1) 平成 6 年の数値は、兵庫県を除いたものである。
 2) 平成 27 年の数値は、熊本県を除いたものである。
 3) 貧困率は、OECD の作成基準に基づいて算出している。
 4) 大人とは 18 歳以上の者、子どもとは 17 歳以下の者をいい、現役世帯とは世帯主が 18 歳以上 65 歳未満の世帯をいう。
 5) 等価可処分所得金額不詳の世帯員は除く。

私たち保育者養成校でも、こうした子どもの貧困への関心は高く、「保育者として、保育の中で、何をどうすればいいのか」を考える機会が多い。ただし、単に子どもの貧困率の推移に一喜一憂したり、貧困の原因や影響を知って危機感だけを募らせたり、公的・民間さまざまな貧困対策に関心・感動するだけでは、40 年に及ぶ保育士経験のある筆者にとっては満足できる保育者養成に到底つながらない。特に、筆者が担当する「保育内容・言葉」

¹ 子どもの体への悪影響（栄養不足、体重減少、貧血、口内炎等）や、学校生活・友人関係等の社会基盤を揺るがすような不利益（不登校、孤独、引きこもり、いじめ、非行、犯罪等）がある。

² 例えば、平成 26 年施行された「子どもの貧困対策の推進に関する法律」がある。

の中で最近顕著にみられる学生の言語能力（語彙数・表現力・言葉遣い・略語・場や時間に合わない挨拶・理解力・想像力等）の低さには憂慮が尽きない。貧困による子どもの貧困能力[3]や学力[4]への影響が問題視される中、保育者にはより一層の効果ある就学前教育を行う役割が求められるだろう。

そこで本稿では、貧困対策につながる就学前教育の効果について国内外の調査研究をまとめ、就学前教育の重要性を明らかにする。そして、幼稚園教育要領や保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領における領域「言葉」の記載事項を確認し、子どもの言葉を豊かに育むための保育者の役割について考察する。

2. 貧困家庭の具体的状況と貧困の連鎖

平成 29 年 2 月 22 日、大阪府立大学教育福祉研究センター・スマイル研究会共同事業が「社会福祉法人だからできる！子どもの貧困へのチャレンジ～保育園・認定こども園における地域貢献事業の形～と題して、「子どもの生活に関する実態調査におけるはく奪指標について」を報告した[4]。その中で「貧困家庭の具体的状況」として回答が多かったのは、「テーマパークに日帰り家族旅行に行ったことがない」「夏祭り等の地域の行事に参加できない」「子どもの園行事である遠足、運動会に参加できない」「子どもを習いごとに通わせることができなかった」「誕生日にプレゼントが買えない」「絵本を買う余裕がない」「給食費が払えない」などの順であった。また、「趣味やレジャーの出費を減らした」「新しい衣服・靴を買うのを控えた」「食費を切りつめた」「生活の見通しがたたなくて不安になったことがある」とある。

また、「趣味やレジャーの出費を減らした」「新しい衣服・靴を買うのを控えた」「食費を切りつめた」「生活の見通しがたたなくて不安になったことがある」とある。

この調査では、言葉の面白さや語彙数に触れる機会でもある絵本を楽しめていない。物語を通して親子で絵本に出てくる主人公の気持ちや言葉のやり取りを楽しめないことになる。行事等に参加できないということは、行事のための準備をしながら期待感や未知の世界を想像することで親との共通の話題ができる。しかし、そういう経験が少なくなることで言葉の発達に影響するものと思われる。そして、子どもが活動する場所が少なくなると活動によって経験することやコミュニケーション不足となり、認知能力・感性・表現力などにも影響がある。

さらに、親に生活に余裕がないと親子の関わりが不足する。勉強のことやうれしかったことや感じていることや考えているが話題になりにくい。子どもは自分が期待されている実感が持てないと、学力の低下に繋がり、褒められる、認められることの経験不足となり劣等感、自己肯定感や自信のなさなどの影響がある。さらに、健康への配慮の乏しさは、情緒的な不安定さの原因となる。

3. 貧困対策につながる就学前教育の効果についての国内外の調査研究

以下は、国立教育政策研究所，平成 26 年 12 月 3 日教育再生実行会議第 3 分科会「教育の効果について～社会経済的效果を中心に～」[3]が発表したデータによる。調査研究の目的は、家庭状況と児童生徒の学力等の関係について分析するために、児童生徒の家庭における状況、保護者の教育に関する考え方に関する調査分析するものである。調査対象は、無作為に抽出された公立学校において、本体調査を受けた児童生徒の保護者全国で小学校 430 校、中学校 414 校を無作為に抽出。調査期間は、平成 25 年 5 月下旬～6 月下旬である。

親や家庭環境が子どもに与える影響は、小学校入学後の学力と極めて高い相関のある「語彙能力」の差は 4 歳時点発生するとしている。

表 2 世帯年収別に見た子供の語彙能力（国立教育政策研究所，教育の効果について，[3]から引用）

世帯年収	3 歳児	4 歳児	5 歳児
(a) 500 万円未満	11.8	17.4	27.1
(b) 500～900 万未満	12.7	20.2	28.3
(c) 900 万円以上	14.4	22.8	32.5
(c)－(a) の得点差	2.6	5.4	5.4

世帯年収別に見た子どもの語彙能力（国立，浜野・内田，2007）では，表 2 のように得点差が 3 歳児までは 2.6 とあるが 4 歳児になると得点差が一気に 5.4 となり「語彙能力」は 4 歳児時点で発生する。小学校入学後の学力と極めて高い相関のある「語彙能力」の差は 4 歳時点発生する。つまり，4 歳までの言葉環境が 語彙能力に影響すると考えられる。

子どもの言葉の獲得は，生まれたときに上げる産声から始まっている。泣き声に応じて大人は，授乳したり，抱き上げてあやしたりする。泣き声は次第にコミュニケーションの役割を果たすようになる。赤ちゃんとかかわる大人は，音声の特徴を聞き分けて対応しているわけではなく，互いに深い理解を求めて試行錯誤する。コミュニケーションを取りながら喃語が始まる。この大人と子どもの関係性が土台となり，2 歳児の「爆発的言葉の獲得」へと成長し，4 歳児の「語彙能力」となる。

阿部彩「子どもの貧困Ⅱ」岩波書店 2014，[5]によると，経済的な余裕のなさや親が生活に追われているなどの家庭の状況により，親子の関わり不足，生活体験不足，進学へのあきらめとなり，学力の低下，社会との繋がりとなる。親から「褒められる，認められる，経験の不足から「どうせ私は・・・」と自信のなさ，劣等感，自己肯定感の低さとなり語彙能力や学力の低下となり，職業選択が狭まり，低収入となり貧困が連鎖する。

4 歳までの言葉の環境や自己肯定感によって語彙数が高まり，自信をもち将来学力に効果が出せる保育を保育者がすべきである。

親に生活の余裕があり、ゆったりと子どもの話を聞き絵本などを読み聞かせ、家庭でも絵本を購入しいつでも手の届くところに絵本がある環境。家族でテーマパークへ行きそこで経験したことや感動したことを話すことができる家庭環境で育つことが言語能力を高める。しかし、貧困状態によって否定的影響を受ける環境であっても、家庭外での教育者との出会いによって改善されると考える。家庭外の幼稚園・保育所・学校で教師と出会い、良好な関係を持つ経験が、就学後では学業成績に影響を与える。特に、母親とのアタッチメントが不安定である場合、教師と良好な関係を持つ経験の効果は大きい。

表3 認知的能力と非認知的能力 代表的なものの例(国立教育政策研究所の就学前教育が、その後の認知的及び非認知的能力発達に与える影響より引用)

認知的能力 代表的なものの例	非認知的能力 代表的なものの例
<ul style="list-style-type: none"> ・IQ(全般的能力) ・言語に関するもの ・算数に関するもの ・科学に関するものなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の理解, 表現, 調整 ・他者理解 ・感情の理解, 表現 ・コミュニケーションなど

*いずれも幼児期以外にも幅広く発達がみられる

3. 1. ペリー就学前計画(アメリカ)[3]

アメリカ ペリー就学前計画の概要は、<実施期間>1962~76年、<対象>低所得層アフリカ系アメリカ人3~4歳児かつ教育上「高リスク」児・123名、<教育内容>学校教育及び家庭訪問と親教育、<教育期間>2年間<追跡調査>3~11歳、14, 15, 19, 27, 40歳である。就学前計画の結果、認知的能力のみならず、非認知的能力が高まることで将来の所得向上や生活保護受給率の低下など長期的効果が表れたと考察している。研究の結果として、就学前教育への参加は、将来の所得向上や生活保護受給率の低下につながる事が明らかになった。また、就学前教育は、認知的能力(IQ)というよりも、非認知能力(動機づけ、粘り強さ、自制心等)を高めることで長期的効果を持った可能性を示唆している。

3. 2. アメリカ NICHHD 研究 [3]

アメリカ NICHHD (National Institute of Child Health and Human Development) 研究の概要は、<調査年>1991~2007年、<対象>1991年生まれの子どもと家族(1364家庭)を0~15歳までの追跡、<主な測定項目> ①家庭状況、親の特徴、親子間アタッチメント②就学前教育経験の有無、就学前教育の質と時間、保育者の行動③各追跡時点における子どもの能力(認知能力+非認知能力+身体的健康)

また、研究の結果として以下の2点が明らかにされた。1点目は、3歳の時点での就学前

教育の質が、就学レディネステスト、言語理解テストで測定された認知発達と関連している。2点目は、4歳半時点での就学前教育の質が、15歳時点の学業成績や社会性と関連している。就学前教育の質が高いと後の成績が高い。特に経済的困難な家庭において就学前教育による影響が大きい。親子関係が不安定でも、就学前教育の質がそれをカバーしている。就学前教育の「質」(生後6, 15, 24, 36カ月)のよさが、15歳時の学業成績の高さと優れた社会性に影響を与える。

3. 3. イギリス EPPE の研究 [3]

イギリス EPPE(Effective Preschool and Primary Education)の研究概要は、<調査年>1997~2007年、<形態>多角的・包括的大規模縦断調査、<主な測定項目>①子ども自身・家族・家庭の特徴②就学前教育の経験の有無③就学前教育の質水準(低/中/高に分類)④認知テスト・社会情緒的発達について調査した。

研究の結果として以下の3点が明らかにされた。1点目、就学前教育の質が11歳時の「国語(英語)」と「数学」と関係していることと、2点目、就学前教育の質が11歳時の「自己調整力」と関係していること、3点目、就学前教育への参加年数の長さが、11歳までの読み書き能力、数学能力、自己調整力、向社会的行動の発達に肯定的効果があることが明らかになった。特に3・4歳時点での就学経験の差がその後の効果に影響する。幼児教育の質が低い場合、幼児教育を受けた経験による効果はない。就学前教育の「質」と就学前教育を受けた「年数」(特に3・4歳時)によって小学6年時の学業成績と社会性(自己調整力)に肯定的影響を与える。

3. 4. 家庭の社会経済的背景と学力

以下の表4を見ると分かるように、家庭の社会背景が高い児童生徒の方が、各教科の平均的正答率が高い傾向にある。

表4 家庭の社会経済的背景と学力(日本, 文部科学省委託研究を引用, 2014年)

社会経済的背景	小学校				中学校			
	国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
低位	53.9	39.9	68.6	47.1	70.7	59.8	54.4	31.5
中低位	60.1	46.1	75.2	55.1	75.2	66.0	62.0	38.8
中高位	63.9	51.4	79.2	60.3	78.6	70.3	67.5	44.9
高位	72.7	60.6	85.4	70.3	83.6	76.7	75.5	55.4

しかし、不利な環境においても成果を上げている学校もある。平成25年度全国学力・学

習状況調査「保護者に対する調査」文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめの細かい調査）[6]の結果を活用した学習に影響を与える要因分析に関する調査研究」（国立大学お茶の水女子大学）先行研究によれば、不利な環境においても成果を上げている学校もある。家庭の社会経済的背景が低い児童生徒の方が統計的に予測される学力を上回る成果を上げている学校である。そうした学校には共通した特徴が見られる。①家庭学習指導の充実、例：児童生徒に宿題だけでなく自主学習に取り組みせ、教員が毎日チェック・コメントをしている。②管理者のリーダーシップと同僚性の構築、実践的教員研修の重視、例：中学校において教科を超えて授業を見せ合い、教え合いを行っている。管理者が明確なビジョンや方針を示し共通理解を図っている。他校の授業を見る研修を促している。③小中連携の取組の推進、例：小中で学習規律・生活規律面や教育課程での系統性を図っている。④言語活動の充実等、例：ノート指導の充実。黒板にめあて（目的）を書き、授業のねらいを明確化させる。教育課程全般で「話すこと」や「書くこと」に力を入れている。⑤各種学力調査の積極的な活用、⑥基礎・基本の定着と小人数指導、例：基礎・基本の徹底。小人数指導、チームティーチング、習熟度別指導の導入、などが挙げられている。

以上の結果を聞いて、筆者は、社会経済的背景、子どもの貧困によって年齢に応じた発達の獲得ができないのではなく、発達の遅れを生み出す要因となっているのは、幼児期の保育者の関わり方によっては、就学前教育での実現も可能ではないかと考えた。

4. 幼稚園教育要領や保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領における領域「言葉」はじめに、平成29年文部科学省が告示された「幼稚園教育要領」領域「言葉」では、どのように述べられているのか考えたい。

「言葉は、経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とあり、1ねらい(2)人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。さらに今回の告示で(3)の「言葉に対する感覚を豊かにし」追加されたことにも注目したい。(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する館カウを豊かにし、先生や友達と心を通わせる。とある。また、2内容(8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。(10)日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。とある。さらに、3内容の取扱い(4)幼児生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。言葉遊びをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。が新設された。

そのことを踏まえると、言葉の理解と、言葉の理解を育てる絵本・物語に接すること、保育者や友達と言葉により心を通わせることと共に、言葉の感覚が追加されたと考える。これは、言葉の関心を促し、言葉の楽しさや面白さや微妙さを言葉遊びなど、絵本を通し

て感じられるように保育者はすべきである。その感覚が言葉の理解が、広がり、コミュニケーションにも使えるようになり、さらに小学校以降の国語の教育の基礎が培われる。保育者が言葉の響きやリズムに敏感になることである。言葉遊びや絵本・物語・しりとり・だじゃれなどで遊びながら語彙を増やしていくことが教育の効果となる。

5. 子どもの言葉を豊かに育てるための保育者の役割

保育者は、言葉を獲得する前の子どもの表情や姿をよく観察し、その場面に適した言葉かけをしたり、子どもの発声を真似たりしながら、子どもに言葉をかけたりした関わりを楽しめるようにしたりすることが必要である。こうした応答的な関わりが保育者との行為が子どもの安心と情緒の安定となり、発語を促すこととなる。

保育者は、子どもが安心して自分を表現することができるよう、あたたかな雰囲気やゆったりとした環境づくりをすることが必要である。子どもの気持ちを受け止め、自ら話そうとする意欲を見守り、子どもと視線を合わせて子どもの声に耳を傾けるようにする。

また、保育者は、子どもの思いや考えを言葉で話すことを助け、聞き役や気持ちを代弁する役割がある。子どもが「先生に話したい、先生に聞いてもらいたい」と思えるように努める。保育者は、子どもが生活の中で日常使う言葉を十分理解できるように丁寧に言葉の意味を伝え、子どもが言葉に親しみ、子ども自身が言葉を聞いたり話したりできるように援助することが大切である。

5. 1. 知的能力と言葉（語彙数）の関係

絵本は、子どもの言葉の獲得に必要な環境の一つであり、言葉の発達に影響する。普段使わない言葉が絵本の物語の中にはあり、絵本は言葉の「宝庫」である。そればかりか、保育者に絵本を読んでもらったり、子ども自身が絵本を手にしたたりして楽しむ。そして、簡単な言葉を繰り返したり、真似て遊んだり、絵本の中の登場人物や主人公に感情移入する。話の展開を楽しんだり、イメージを広げたり、友だちと共有して情緒が安定し、子どもに聞く姿勢が身に付いてきたら、絵本だけでなく、お話や童話、視聴覚教材などを見たり、聞いたりできる環境づくりと教材研究が保育者に求められる。また、物語のできごとに子ども自身が経験したことを重ねたり、主人公に自分自身を投影したり、ごっこ遊びに再現したりする。例えば、お店屋さんごっこや郵便屋さんごっこなどを通して社会との繋がりや文字や記号のやり取りの遊びへと広がり、保育者の援助や保育技術、アイデアが必要となる。文字に関心を持つ前に、言葉で伝える経験があり、やがて伝達の方法として文字で伝えたいという子どもの意欲がでて、伝え合うことの喜びが芽生える。保育者は十分な用具や室内外の環境づくりにも配慮をする。

人間の体の育ちは誰がみてもわかる順序がある。子どもの知的能力や言葉の発達にも道筋がある。体の育ちは見てわかる部分が多いが、心や言葉や知的能力は分かり難い。

しかし、赤ちゃんの行動や目を見つめ合うと赤ちゃんの思いを探り当てるような言葉が

湧いてくる。赤ちゃんとの生活の中で、同じものを見つめたり、泣いたり笑ったり表情で人のかかわりで伝える・伝わる・共感する経験が知的能力と言葉の発達となる。

3歳までの愛着関係が言葉の土台となる。「ああ、〇〇ちゃんは今、壁にあたってキラキラ動くお日様を見ていたのね、きれいね」と言葉をしゃべらない赤ちゃんの気持ちが通じ共感できる。赤ちゃんは、生まれながらにして人とかかわる能力をもっている。母親を始めとする周りの人が、自分にどうかかわるのか、自分の世話をどのようにしてくれるのかに関しては、敏感に感じ取る能力をもっている。たとえば、赤ちゃんが「泣く、甘え泣き」をするようになると保育者は「どうしたの？お腹が空いたの？眠たくなったの？」と言いながら赤ちゃんを抱っこして目を見ながらあやす。すると、体位が変わり自分に関心を持ってくれることで泣き止む。日常的に繰り返されるとやがて赤ちゃんは、母親や特定の人に対して愛着を示すようになる。この時期に「人を信じてよい」と思える感情が育つ。家庭外の保育者と出会い、良好な関係をもつ経験が愛着関係の成立となる。「人見知り」が現れさらに大人と子どもの愛着関係は深まり大人の言葉を真似て発語につながる。

このように、発語の前の愛着関係や信頼関係が深まるとき、自分にかけている言葉の質によって内言語発達が育ちやがてそれは、知的能力となる。就学前に、人との関わりと絵本等の文化財との出会い、ごっこ遊びや見立て遊びは人間関係も育つが言葉のやり取りや相手の気持ちや伝えたいことを理解するなど知的能力とも深く関係している。多様な言葉の環境と豊かな保育経験年数によって、4、5歳頃から語彙数の獲得に効果が出る。

5. 2. 言葉を育てる環境

また、遊びの環境でも、絵本の読み聞かせや文字や数字に触れる環境を生活の中に整備する必要がある。貧困がもたらす子どもへの影響でも述べたように、「生活体験の不足」「褒められる」「認められる」「社会的スキル」は保育者の関わりで改善される。例えば絵本を読み聞かせる。絵本『おてだまのたね』（秋田・向陽幼稚園の実践記録より）織茂恭子絵、福音館書店（1996年）には、「いなほ」「べいじゅ」「おすそわけ」「ほころび」など、日常使わない言葉が出てくる。子どもたちは言葉の意味を理解すると生活の中で使うようになり言葉の獲得に繋がる。やがて、絵本で覚えた文字を周囲のいろいろな環境の中で発見し照らし合わせ、文字を獲得する。絵本『おやおや、おやさい』石津ちひろ文、山村浩二絵、福音館書店（2010年）には、「きゅうりは きゅうにとまれない」「かぼちゃのぼっちゃんいけに ぼっちゃん」「はくさいのとうさん てれくさい」などの言葉が登場する。この絵本を通して子どもは、言葉のユーモアも理解し、ごっこ遊びに発展する。

廊下で友だちとぶつかりそうになった時「きゅうりは きゅうにとまれない」と使ったり、散歩に出かけて池の横を通ると子どもたちが声を合わせて「かぼちゃの ぼっちゃんいけに ぼっちゃん」と言ったりして、言葉を介して人間関係の構築も進められる。

また、子どもが褒められる経験をするには、保育者が子ども理解を深め保育者自身の語彙数を豊かにし、愛情をもって子どもに語りかけることによって実現できる。子どもが自

然の神秘性や不思議に出会うことや社会のルールに触れたり、文化にかかわったりする実体験は、保育者の保育内容や園の行事の取り組みで経験を深められる。

園外保育で美術館見学、クッキング活動、野菜や草花の栽培などの経験から自信をもったり、充実感を味わえたりする。その経験を絵や製作や文字表現へと発展することで知的能力が高められる。投げやりな態度が和らぎ、将来への希望に繋がるのではないか。お泊り保育で友だちと夕陽が沈む様子や朝日が昇る自然の摂理にも触れさせたい。そこで、きっと子どもたちは壮大な力と勇気を感じるに違いない。

保育者が、子どもに肯定的に語りかけ、質の高い幼児教育を実践することで言葉の発達への効果と知的能力を高める効果がある。言葉は、放っておけば自然に言えるようになるものではない。周りの人とかかわることにより、お互いの意思を伝達する経験を通して獲得される。言葉の発達にとって人的環境である保育者の影響は大きい。最後に、心の拠り所となる保育者の存在を具体的に考える。

たとえば、6か月から2歳頃の<指さし行動>について考えると、子どもが何かを見つけて「うん、うん」と言いながら指さす行動に保育者の視線を向けみると電線に雀が止まっている場合、保育者は子どもに「よく みつけたね。おしえてくれてありがとう」「チュン、チュン ね」「そうね、チュン、チュンって鳴くすずめだね」「すずめ、電線にいっぱいいるね」等と3通り以上は、言葉を返すことが大事だろう。このように実体と音声とが関連づけられ「言葉」として意味付けられ形成されていくためには、子どもと生活を共にしながらさまざまな実物にふれ、その子がその実体を表現する音声に関心を持ち、子どもの指す指先を一緒に眺めることで子どもと体験を共有し言葉化してくれる保育者の存在が必要である。

また、保育者が常に心がけ自然な行動として子どもにかかわるときの重要な約束事がある。それは、<保育者の行動より子どもへの語り掛けが先>である。たとえば、子どもは、自分にかかわろうとする相手をじっと見てからやがて泣いたり、そっと手を出したりする行動がある。子どもの表現の世界は総合的に広がる。保育者も子どもを抱っこするときに黙って子どもを抱き上げるのではなく、まず、「言葉」があって、その次に行動がついてくることを自覚することが大事である。「〇〇ちゃん、お腹が空いたね。ご飯にしようか？抱っこするよ」「はい。おいで。」と保育者が手を差し出すと赤ちゃんも手を出してくる。まだ月齢が小さく手を出さなくてもこのことを繰り返すと自分の意思で手を出すようになる。

3歳以上になっても保育者は行動に出る前に言葉ありきであることを心がけるべきである。以上のような子どもへのかかわりは、一日の大半を園で過ごす子どもたちと生活をしている保育者によって言葉を獲得する順序と信頼関係の克服でき、学習能力が高まる事柄である。したがって、家庭や親の歴史を変えることはできないが保育者の保育の質で改善できることである。

6. おわりに

調べを通して、就学前教育で行われている保育の質、言葉環境が子どもの「語彙数」に影響していることが明確にされていた。社会的経済効果（子どもの貧困）と子どもの言葉の発達、知的能力は比例すると思いでいた筆者は「語彙数」は就学後の学習能力として現れることに身の引き締まる思いをしている。子どもを取り巻く大人の影響で子どもの知的能力を高めることができるからである。

思い起こしてみると、就学前の園の生活の中で保育者の使用している言葉には、指示、命令といった規制の言葉や、方向付けたりする言葉が多い。そしてそれらの言葉は、日々パターン化されがちである。朝の挨拶から「さあ、みんなお外で遊びましょう」「ブランコは順番に、並びましょう」「お片付けしましょ」「これは危ないからやめましょう」と言う。

また、「上手ね」「がんばってね」と一様に単純な褒め言葉しか使わない。保育者自身の言葉は、その場の状況に大きく作用されるのだから多様であるべきである。そして、保育者の語彙は豊富でなければならない。子どもの言葉を豊かにするためには、保育者が子どもの感じていることや求めていることを心で受け止めることができる感性をもつことが何よりも大切である。子どもの興味、関心に添い自然な形で話すことから書き言葉に出会うことが、やがて就学し、書き言葉を使って思考を深めることにつながると言える。

保育者は、子どもの発達にとって何が大切かを瞬時に判断しながら対応している。子どもの生活の中で、多様な保育者の言動や子どもとの自然な会話があることは、子どもの言葉の働きを促し、子どもの将来的な知的能力にまで影響を及ぼす。大学では「言葉」に関する科目では、その自覚を学生がもてるよう授業計画を立てる。

例えば、授業の中で学生は、子どもの興味や発達に合わせ、季節や行事別の絵本リストの作成をする。また、物語絵本（生活絵本・創作絵本・昔話絵本）、知識絵本（ものの絵本・科学絵本・数やことば絵本・図鑑・写真絵本・動物絵本・乗り物絵本）に分類していつでも保育の中で利用できるようにする。さらに、保育者として子どもの学力にまで影響する職業であることを自覚できるよう指導する。学生自身の語彙数が養えるよう普段から言葉遣いの指導をする。

子どもの貧困からくる学習能力の低下や言葉の獲得は、保育者の言葉環境、豊かな言葉を子どもへ提供することで子どもの語彙数が増え、将来の学習能力を高められることを自覚して子どもたちにかかわれるようにしたい。子どもの豊かな遊びと言葉を支える保育者の養成することで実現するのではないだろうか。

引用文献

- [1]厚生労働省、平成25年の国民生活基礎調査の概況

<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/index.html>> (平成 29 年 7 月 31 日)

[2]厚生労働省，平成 28 年の国民生活基礎調査の概況

<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/index.html>> (平成 29 年 7 月 31 日)

[3]国立教育政策研究所，教育の効果について～社会経済的效果を中心に～

<https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pf_pdf/20141203.pdf> (平成 29 年 7 月 31 日)

[4]大阪府立大学教育福祉研究センター・スマイル研究会共同事業，社会福祉法人だからできる！子どもの貧困へのチャレンジ～保育園・認定こども園における地域貢献事業の形～，(2017 年 2 月 22 日) 大阪府国際会場，大阪府福祉部部長，酒井隆行の報告

[5]阿部彩 (2014 年 6 月 17 日) 『子どもの貧困Ⅱ』岩波書店

[6]文部科学省，平成 25 年度全国学力・学習状況調査「保護者に対する調査」，文部科学省委託研究「平成 25 年度全国学力・学習状況調査（きめの細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学）（平成 26 年 3 月）

参考文献

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2015 年 2 月 25 日）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

厚生労働省（2011 年 9 月 16 日）『保育所保育指針解説書』フレーベル館

戸田雅美（2009 年 3 月 31 日）『演習 保育内容言葉』建帛社

文部科学省（2017 年 12 月 1 日）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

無藤隆 汐見稔幸 砂上史子（2017 年 5 月 15 日）『ここがポイント！3 法令ガイドブックー新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の理解のためにー』フレーベル館

引用絵本

織茂恭子絵，向陽幼稚園作（1996 年）『おてだまのたね』福音館書店

石津ちひろ文，山村浩二絵（2010 年）『おやおや，おやさい』福音館書店